

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730693

研究課題名(和文) 多元的な見方・考え方を育成する小・中・高一貫歴史カリキュラムの開発研究

研究課題名(英文) Curriculum Development of History Education between Elementary and Secondary School for Fostering Pluralistic Perspectives

研究代表者

山田 秀和 (YAMADA, Hidekazu)

岡山大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：50400122

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、多元的な見方・考え方を育成する小・中・高一貫の歴史カリキュラムモデルを開発することにある。本研究では、アメリカの社会科に手がかりを求め、多元的な見方・考え方の育成という観点から小・中・高を通じた歴史カリキュラム編成の方法論を考察した。また、その方法論を踏まえて小・中・高の具体的な歴史授業のモデルを複数開発し、検討を加えた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop the curriculum of history education between elementary and secondary school to foster pluralistic perspectives. In this study, methods for curriculum organization of K-12 history education were considered from the viewpoint of fostering pluralistic perspectives through analysis of social studies in the U.S. On the basis of these methods, concrete history lesson models at the elementary and secondary level were developed and examined.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：社会科教育 歴史教育 小・中・高一貫 カリキュラム 多元的な見方・考え方

### 1. 研究開始当初の背景

多面的な見方・考え方の育成について考えることは、社会科や歴史教育にとって重要である。なぜなら、ある事象に対して、様々な見方・考え方が共存・競合・変化しているのが現実であり、だからこそ、子どもの見方・考え方を固定化・一元化しないような工夫が求められていると考えられるからだ。

こうした観点から歴史教育を見た場合、個々の学校段階のみならず、小・中・高を通じた広い視野で考えていく必要がある。歴史教育は、ともすれば特定の社会像・歴史像・地域像を、小・中・高を通じて繰り返し伝達し、子どもの見方・考え方を閉ざす可能性を有しているからである。

このようなリスクを回避・軽減し、多面的な見方・考え方を育成する小・中・高の歴史カリキュラムを提案するべく、本研究に着手した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、小・中・高を通して多面的な見方・考え方を育成する方法論を究明し、それに基づく歴史カリキュラムモデルを開発することにある。

具体的には、小・中・高一貫のカリキュラム開発が盛んなアメリカの社会科を手がかりにしながら、以下を解明する。

- ・多面的な見方・考え方の育成論(その類型)
- ・上記に基づく小・中・高一貫歴史カリキュラムの構成原理
- ・単元・授業構成の原理
- ・わが国の教育実践の改善に資する小・中・高一貫歴史カリキュラムモデル

### 3. 研究の方法

次のように研究を進めた。

#### (1)資料収集

研究開始初年度より継続的に収集したのは以下の文献等である。

- ・アメリカにおける社会科・歴史教育関連の理論書・専門書
- ・アメリカ各州の社会科カリキュラム・スタンダード
- ・アメリカの様々な出版社から発行されている歴史教科書、歴史教材
- ・日本における社会科・歴史教育関連の理論書・専門書
- ・小・中・高一貫や社会科・歴史教育の取り組みに関連する附属学校等の紀要や指導案、書籍

#### (2)アメリカの社会科・歴史教育を対象にした研究

アメリカの社会科を手がかりとして、多面的な見方・考え方を育成する歴史教育の理論を考察するとともに、カリキュラムの分析を行った。特に、ニューヨーク州の社会科カリ

キュラムと NCSS (National Council for the Social Studies, 全米社会科協議会) の改訂版社会科カリキュラム・スタンダード(2010)を手がかりにして考察を進めた。なお、当初は類型化を予定していたが、大局的に分析することが難しいと判断し、個別分析を進めることで研究課題に迫ることにした。

(3)日本の社会科・歴史教育を対象にした研究  
日本の社会科や歴史教育の改善を視野に入れて、本研究期間中に次のような取り組みを行った。

- ・「子どもに習得させる知識」の観点からの考察
- ・「子どもの市民的態度」の観点からの考察
- ・小・中・高の歴史授業モデルの開発
- ・開発した歴史授業モデルの検討

ここでは、日本の教育内容をういた授業開発に重点を置いている。なお、小・中・高一貫の歴史カリキュラムモデルの開発については、具体的で実践的な授業モデルの開発を積み重ねることで迫ることにした。

### 4. 研究成果

本研究は、アメリカの社会科・歴史教育を対象にした研究と日本の社会科・歴史教育を対象にした研究を主な柱にしている。それぞれについてまとめておきたい。

#### (1)アメリカの社会科・歴史教育を対象にした研究

##### カリキュラム分析

前年度までの研究課題「小・中・高一貫性に基づく歴史教育カリキュラム開発のための基礎的研究」にて分析を試みたニューヨーク州の社会科カリキュラムを、多面的な見方・考え方の育成という観点からあらためて検討した。

本カリキュラムは、学校・学年段階の上昇に応じて歴史教育のスタイルを変化させており、多面的な見方・考え方の育成をめざしているものと考えられる。「工業化」についての学習内容をもとに報告したい。

小学校段階の第4学年「地域の歴史と地域の政治」における工業化の授業は、自分たちのコミュニティの工場を出発点にして、工業の発達や労働問題に迫らせるように計画されている。

第7・8学年「合衆国とニューヨーク州の歴史」では、たとえば、工業化の歴史を学習する中で、希少性や需要と供給、市場、資源、経済成長のような経済概念に迫ることなどがねらいとなっている。こうした経済概念が学習活動の中で直接的に扱われるとは限らないが、歴史学習の中で、経済的な見方・考え方を育成しようという意図を読み取ることができる。

第11学年「合衆国の歴史と政治」では、以前の学年よりも深く工業化の歴史を学ば

せることになる。しかし、単純に内容が増えただけではなく、現在に至る歴史的過程を批判的に読み解き、あらためて問い直すことが求められている。たとえば、シャーマン独占禁止法が競争保護に対してどの程度まで効果的だったのか、といったように、「どの程度」「どのくらい」という問いが多く出てくるようになっている。歴史に対する判断を問う項目が増えている。

これらの内容構成を、多元的な見方・考え方の育成という観点から検討すると、時間的な見方・考え方、社会の様々な領域に関する見方・考え方、子どもの認識や判断の枠組みに関する見方・考え方を、連続的・発展的に広げ、深めようとしていることが読み取れる。このような構成は、多元的な見方・考え方を育成するカリキュラムを開発するための一つの指針となるだろう。

#### カリキュラム分析

社会科から地理歴史科・公民科に分化する日本の現実により即した示唆を求めるために、NCSSの改訂版社会科カリキュラム・スタンダードを分析した。このスタンダード自体は、社会科の分化ではなく、統合を前提としており、必ずしも日本の社会科や地理歴史科・公民科と整合するわけではない。しかし、汎用性の高いフレームワークになっており、分化的傾向が強いカリキュラムに合わせて活用することもできると判断した。

本スタンダードは、10のテーマを設定している。テーマは改訂前と変わらず、「文化」「時間、連続性、変化」「人々、場所、環境」「個人の発達とアイデンティティ」「個人、集団、制度」「権力、権威、統治」「生産、消費、分配」「科学、技術、社会」「グローバルな関係」「市民の理念と実践」である。各テーマは、三つの学年段階で区分（pre-K through 4, 5-8, 9-12）されている。実際の授業は、複数のテーマにまたがって組織されることも多いが、本研究では、歴史教育の中軸となる「時間、連続性、変化」に限定し、多元的な見方・考え方の育成という観点から各学年段階の傾向性を分析した。

このテーマを多元的な見方・考え方の育成という観点から考察すると、様々な視点や立場から捉えた「複合的な解釈」や、異なる「複数の解釈」を、学年段階の上昇に応じて形成・評価させるための方法論に迫ることができる。たとえば、様々な立場から事象を解釈できることや、異なる解釈が存在することを理解させることから、様々な解釈を比較させたり、評価させたりすることへと発展していくような、連続的な段階性を、本テーマの考察を踏まえて想定することができる。

ここで考察した「複合的な解釈」と「複数の解釈」の形成・評価という視点は、多元的な見方・考え方を育成するカリキュラムを開発するための一つの指針となるだろう。

#### (2)日本の社会科・歴史教育を対象にした研究 授業モデル開発・検討

前年度までの研究課題にて、「鎖国」を題材とした小・中・高の歴史授業開発の構想を行っていた。これは、ニューヨーク州の社会科カリキュラムの分析を踏まえたものである。本研究課題に入ってから、その取り組みを継続し、授業化を進め、さらに、多元的な見方・考え方の育成という観点から検討を加えた。

具体的には、小・中・高の教員とともに授業を開発し、その成果をもとに多元的な見方・考え方を育成する授業構成についての検討を行った。まずは、開発された授業を紹介しておきたい。

江原知博氏によって開発された小学校の「江戸の世の“韓流ブーム”」は、現在に残る朝鮮通信使との交流のなごりを調べることから過去と現在のつながりを追求する授業である。

西中明彦氏によって開発された中学校の「“鎖国”による情報格差と江戸幕府の支配力強化」は、「情報と権力」の関係について歴史的な事象をもとに探る授業となっている。

佐藤陽子氏による高等学校の「『鎖国』像を問い直す」は、歴史叙述や歴史像を問い直す授業である。教科書が描く鎖国像の変遷を読み解き、子どもたちの持つ鎖国像をゆさぶるとともに、歴史解釈について考えさせる授業となっている。

これらの授業を、多元的な見方・考え方の育成という観点から見ていくと、どれも一元的な見方・考え方からの脱却を図っていることがわかる。江原氏の授業は、朝鮮通信使のみならず、北海道や琉球との交流・交易に視野を広げ、それらの共通点を考えさせようとしている。西中氏の授業は、鎖国という事象に対して政治的視点から迫り、政治的な見方・考え方を育成しようとしている。佐藤氏の授業は、子どもの認識枠組みに挑戦するものであり、見方・考え方の問い直しを迫るものである。開発された授業を基盤として、多元的な見方・考え方を育成する小・中・高の一つの授業モデルを検討することができた。

#### 授業モデル開発・検討

第二の取り組みは、NCSSの改訂版社会科カリキュラム・スタンダードの分析を踏まえた小・中・高の歴史授業開発である。大学院生の協力のもとで、小・中・高の授業モデルを二セット開発した。本取り組みで開発する授業は、先の「鎖国」ほどの革新的な構成ではないが、より日本のカリキュラムに合わせやすく、実践しやすいものと位置づけている。

開発した小・中・高の授業の一つは、「開国」を題材とするものである。小学校授業は、開国の理由と社会の変化を、様々な角度からクラスメートと探らせるようになっている。中学校授業は、日米修好通商条約締結の意味や影響を、様々な人々の立場で考察させるよ

うに構成している。高等学校授業は、日米修好通商条約締結の理由および不平等性についての学者の見解を比較し、評価させるように計画している。

もう一つは、「五・一五事件と政治の変化」を題材とするもの。小学校授業は、五・一五事件と政党政治崩壊の理由を、様々な角度からクラスメートと探らせるようになっている。中学校授業は、五・一五事件と政党政治崩壊の理由を、当事者や関係者など様々な人々の立場から考察させるように構成している。高等学校授業は、五・一五事件と政党政治崩壊の理由についての学者の見解を比較し、評価させるように計画している。

これらの授業を開発し、学会にて報告した。また、学校の教員からも様々な意見をいただくことができた。

ここで開発した授業は、カリキュラム開発のための基礎となるモデルと位置づけることができる。本モデルをさらに検討・発展させるとともに、他の題材でも開発を継続していく必要があると考えている。

なお、本研究期間中に、子どもに習得させる知識の観点や子どもの市民的態度の観点から、見方・考え方の育成や学習者としての子どもに関する知見を得ることができた。また、附属学校等の様々な研究会に参加することで、理解を深めることができた。これらの取り組みで得られたことを踏まえて、さらにカリキュラムや授業の開発を進めていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

山田秀和「社会科学習において『様々な立場で考える』とは」『東書Eネット』, 査読無, 2013, web掲載

(<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/download/fr1/htm/esdf1602.htm>)

山田秀和「小中高一貫・全領域で歴史的な見方・考え方の育成を考える」『東書Eネット』, 査読無, 2013, web掲載

(<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/download/fr1/htm/csdf1534.htm>)

山田秀和「歴史学習で育成する見方・考え方の射程」『東書Eネット』, 査読無, 2012, web掲載

(<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/download/fr1/htm/jsdf1297.htm>)

山田秀和「小・中・高の歴史教育における段階性—現代社会理解のためのストラテジ—」『社会科研究』, 査読有, 第75号, 2011, pp.11-20

山田秀和「歴史教育の小・中・高一貫性を問う—授業構成における段階性—」『全歴研究紀要』, 査読無, 第47集, 2011, pp.51-54

〔学会発表〕(計2件)

山田秀和, 神山大樹, 山成宏明, 安藤嶺, 福本紗菜, 松浦由佳, 松本千明, 森分志学「多元的な見方・考え方を育成する小・中・高の歴史授業開発—一貫性・段階性を重視して—」全国社会科教育学会第62回全国研究大会, 2013年11月10日, 山口大学

山田秀和「日本における子どもの市民的態度の特質」第2回全国社会科教育学会・韓国社会教科教育学会研究交流, 2012年9月23日, 大韓民国・慶尚大学校師範大学

〔図書〕(計1件)

山田秀和「社会科における説明」社会認識教育学会編『新社会科教育学ハンドブック』明治図書, 2012年, pp.169-177

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

山田 秀和 (YAMADA, Hidekazu)

岡山大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号: 50400122